

指導活用技術  
分類名〔畑・特用作物〕

指 7	麦類連作における難防除雑草ネズミムギの対策
-----	-----------------------

宮城県古川農業試験場

## 要約

麦類連作において、夏期に耕起を行わず、播種前に非選択性茎葉処理剤、播種後～麦類出芽揃期に土壤処理剤を処理することで、ネズミムギの発生量を大きく減らすことができる。

普及対象：麦類の連作を行っている土地利用型経営体  
普及想定地域：県内全域

## 1 取り上げた理由

近年、県内の麦類連作において、ネズミムギ(イタリアンライグラス)のまん延により収穫が放棄される事例があり、対策が急務となっているが、麦類の播種後にネズミムギが発生した場合の有効な防除法がない。そこで、麦類不作付け期間の耕起管理法と除草剤を組み合わせた防除体系を検討したところ、実用可能な技術が得られたので、指導活用技術とする。

## 2 指導活用技術

(1) 麦類連作におけるネズミムギは、①麦類収穫後の夏期に耕起を行わず、さらに、②麦類播種前に非選択性茎葉処理剤、③麦類播種直後～出芽揃期に土壤処理剤を組み合わせた防除体系により、発生量を大幅に減らすことができる(図1)。

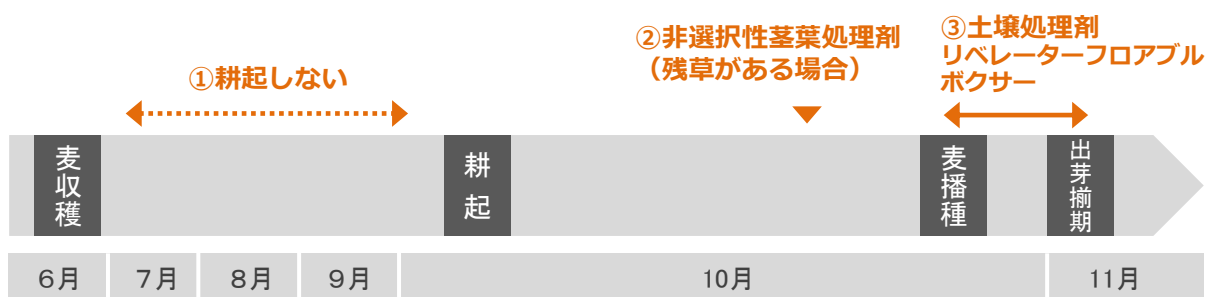


図1 麦類連作におけるネズミムギの防除体系

(2) 夏期に耕起を行わないことで、麦類播種後のネズミムギの発生量は、耕起を行った場合の10%以下となる(図2)。

(3) 土壤処理剤は、ネズミムギに比較的効果が高いとされるジフルフェニカン・フルフェナセット水和剤(商品名：リベレーターフロアブル)やプロスルホカルブ乳剤(商品名：ボクサー)を、麦類播種直後(ネズミムギ発生前)～麦類出芽揃期頃(ネズミムギ出芽始期)に処理することで、越冬後のネズミムギの残草量は10%程度となる(図3)。

## 3 利活用の留意点

- (1) 本試験は、古川農試験場内ほ場において、事前にネズミムギの種子を散布するか、前年にネズミムギを繁茂させて行った。
- (2) 土中のネズミムギの種子寿命は短く、1年で9割以上減少する(市原ら, 2010)ことから、麦類連作におけるネズミムギの防除は、水稻や大豆等への作付け転換が有効である。よって、防除の基本は作付け転換であり、本防除体系は、作付け転換できない場合に実施するものとする。

- (3) 麦類播種後のネズミムギの発生量を減らす観点からは晩播が有効であるが、麦類の生育量不足はネズミムギの生育を促進するので、極端な晩播は避ける。
- (4) 麦類播種前または麦類播種時の耕起で完全にすき込み切れないネズミムギの防除には、非選択性茎葉処理剤が有効であるが、他県でグリホサート及びグルホシネート抵抗性のネズミムギが確認されているので、同一系統の剤を連続して使用しない。
- (5) 土壌処理剤の防除効果をもとめるため、碎土率は70%以上を確保する。
- (6) ネズミムギは、ほ場周縁部からほ場内に侵入するので、ほ場周縁部の防除を行うことが重要である。

(問い合わせ先：宮城県古川農業試験場作物栽培部 電話0229-26-5108)

#### 4 背景となった主要な試験研究

- (1) 研究課題名及び研究期間  
地域レベルの問題雑草管理指針の策定と防除技術の体系化(平成27～令和元年)
- (2) 参考データ

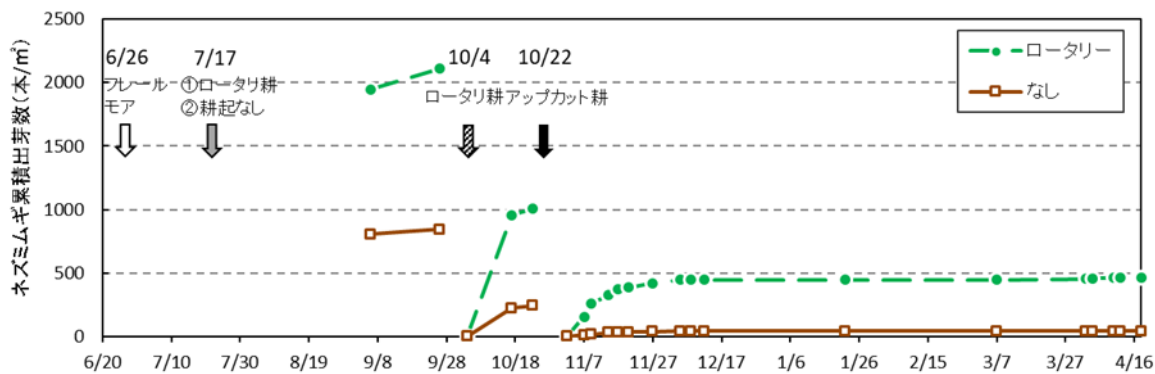


図2 ネズミムギの時期別累積出芽本数(平成30年)

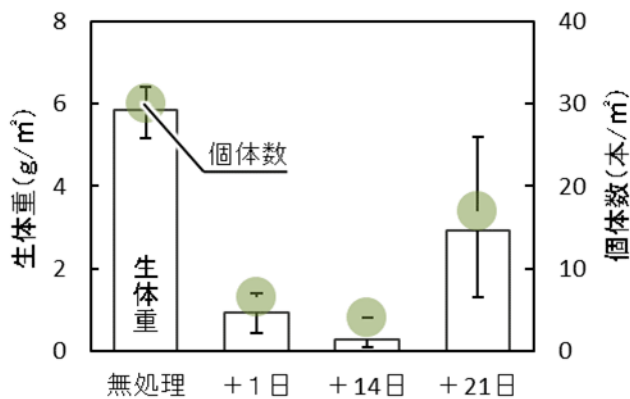


図3 ジフルフェニカン・フルフェナセット水和剤(商品名:リベレーターフロアブル)のネズミムギへの防除効果(平成30年)

注1) +○日は、大麦播種後日数を示す。  
処理日:10/28(+1日), 11/10(+14日),  
11/17(+21日)

注2) 残草調査は、4/4(播種後160日)に実施

- (3) 発表論文等  
なし
- (4) 共同研究機関  
なし